

プロフィール

大学卒業後、医療従事者として医療機関に従事する傍ら、国境なき医師団の活動に影響を受け開発途上国に対する支援活動に関心を抱く。国際的な労働環境に身を置きたいと考え外資系企業に転職をした後に大学院に進学、公共経営・政策分析プログラムを修了。在学中に国連開発計画（UNDP）シエラレオネ事務所の民主化促進部門においてインターンシップ（選挙支援と国会支援部署に所属）を経験。大学院在学中よりインドを対象とした開発系 NGO の活動に従事。海外実務研修中は、UNDP ウクライナ事務所の民主化促進部門において市民参加型政策意思決定と汚職防止のためのプロジェクトに従事。現在は外務省欧州局中東欧課において中東欧諸国の外交・政治経済情勢に関する業務に従事している。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

インターンシップでフリータウンに滞在していた際に、平和構築人材育成事業を経て JP0 として現地で活躍されていた日本人の方にお目にかかり、本事業の活動内容を直接教えていただき、強い関心を抱いたためです。

更に、大学院卒業後は事業説明会に足を運び、1) 充実した国内研修と講師陣、2) UNV としての実務経験を積めること、3) キャリアサポートが受けられる等、平和構築分野でのキャリア構築に必要な要素が揃っていると感じました。また、UNV の掲げるボランティアリズムとは、自発的な意志で現地の人々と積極的に関わり合いながら共に開発と平和構築に携わることだと理解し、私もその一員として UNV の活動に従事したいと思うようになりました。これらを実現するためには、本事業が最適であると感じました。

この分野でのキャリア構築を目指したのは、本事業に参加する以前に個人でアジア・アフリカ・中東といった開発途上国を訪問・滞在したことがきっかけです。

例えばナイロビでは、スーダンで生まれ幼少期に少年兵にされていたという若者や、ダルフルから逃避して来た難民に遭遇しました。また、エチオピアのシミエン山で親しくなった現地の男性は、エリトリアの独立戦争の際に兄弟 5 人のうち 3 人を、私たちが立っていたその足元で亡くしたと語りました。更にバイルートでは、イスラエル軍の空爆により破壊された橋や住居がそのまま残っており、惨状を当時のままに物語っていました。アフリカ・中東の特に国境地域においては、数え切れないほど多くの国連の車輛やスタッフを目撃し、これらは決して忘れることのできない記憶となり現在でも鮮明に脳裏に焼き付いています。開発途上国で友人となり親しくなった多くの人々の中には、今でもなお苦難に満ちた環境で生活をして行かざるを得ない人々が無数にいるのだと、ふと思い出します。

人の生死が日常的であった病院勤務時の経験に由来するものと考えられますが、私は現在でも人命の尊さや社会における機会の平等は生まれ落ちた場所や時に大きく左右されるべきではないと考えています。なぜなら、単純に私自身が彼らであったかも知れないからです。こうした地域に住む人々と多く関わって来た中で、自身としても平和構築や紛争予防に貢献したいという強い意志を抱くに至りました。

2. 国内研修の感想は？

一重に、とても贅沢な機会だと感じました。世界各国の国連・研究機関・NGOをはじめとした平和構築の現場で数多くのご経験を積まれた講師の方々から直接講義を受けることができました。また、内容としてはプロジェクトサイクルマネジメント、モニタリング評価、国連平和構築基金（UNPBF）のプランニングといった現場レベルで必要とされるスキルをワークショップ形式のトレーニングを通して身につけることができました。更に、アジア人 15 人、（自分を除いて）日本人 13 人の研修員からも大きな刺激を受けました。様々な経験やバックグラウンドを持ち、平和構築への意識が高いメンバーと共に同じ目標に向かって研修に取り組んだ経験は今後も大きな糧になっていくものと思います。

更に講師の方々と交えての食事会や講義が終わった後のメンバーとの補足の勉強会、UNV インタビューを想定した練習、エクスカージョン等、講義以外の時間も含めていずれも大変貴重で充実した時間となりました。

国内研修で出会ったメンバーは、その後も UNV の同期メンバーとして所属機関・プロジェクト・治安情勢・生活・進路に関しての情報交換や相談をし、また励まし合える素晴らしい仲間になったと思います。今後もメンバーとの交流は大事にしていきたいと思います。

3. 海外実務研修での活動について教えてください。

- ウクライナは 1991 年の独立以後も、ソ連時代から続く中央集権的なトップダウン型政治システムが依然として残り、中央・地方行政共に人・物・資金運用の面で効率が思わしくなく、国民・市民からは信頼されているとは言い難い状態に陥っています。これに追い打ちをかけるように政治腐敗や汚職が頻発し、常習化しています。そこで、私が所属していたプロジェクト“Smart Practices for Oversight by Non-State Actors on Administrative Service Provision”では、まず地方行政のあり方から改善していこうというボトム・アップのアプローチを試みていました。リヴィウ（ウクライナ西部の都市）のパートナーNGO のキャパシティビルディング（capacity building）を支援して、市民を積極的に地方行政の政策意志決定に参加させるよう促し、透明性とアカウンタビリティのある行政の実現を目指していました。
- UNDP はウクライナにおいて NGO、地方行政、経済改革調整委員会、議会の委員会といった組織と連携し、プロジェクトの中心的なメンバーとなっていました。私は、市民社会開発

アソシエイト（Civil Society Development Associate）として以下のような活動に従事しました。

- ウクライナの民主化の促進・行政の効率化・汚職防止等を目的とし、市民参加型政策意思決定、NGO に対するキャパシティビルディング、ネットワーク構築等に関し、ウクライナ国内及びグローバルレベルでのグッドプラクティスをリサーチ。また、これに際し政治・経済・法的アプローチに加え、文化的・歴史的背景も念頭に置き日常的に情報収集・分析を行い、リサーチペーパー・レポート・データベース等を作成し、プロジェクト・マネージャーに提出。
- UNDP ウクライナ事務所では、積極的な E-ガバナンス（ウェブサイト、携帯電話と SMS、スマートフォンとそのアプリといった情報通信技術を用い、透明性・アカウンタビリティ・市民参加型意思決定のあるガバナンスの実現を目指す）の導入を推進している。日常業務の中で E-ガバナンスに関するリサーチを推し進め、これは行政の効率化・汚職防止に有効なツールであるばかりでなく、更に平和構築や紛争予防にも役立て得るものであるとの見解を得た。これらのケースに対し、世界から 100 以上のグッドプラクティスを情報収集・分析し、データベース、レポートを作成。2013 年 11 月以降、依然として政情不安が続くウクライナ情勢を反映し、2014 年 4 月上旬に開催された UNDP と国家安全保障・国防会議の共同開催イベントの出席のため、プロジェクト・マネージャーに上記資料を提出。
- ウクライナの NGO の活動を支援するため、国内 26 の国際機関・政府系開発機関・大使館といったドナー機関の助成金やキャパシティビルディングに関する情報を収集、ドナーマッピング・データベースを作成。
- プロジェクトの主要パートナーの NGO を、他の NGO を支援し中心的な役割を果たすためのリソースセンターとして育成・支援するため、国内外 15 のリソースセンターを含む合計 60 以上の NGO、学術機関、シンクタンク等のグッドプラクティスを情報収集・分析した。効率的なリソースセンターのあり方を、財政・人的資源とスタッフに求められるスキル・ウェブサイトの構成・インフラ等の側面からアプローチし、33 ページのリサーチペーパーを作成。
- ドナー代表、主要な受益者、主要パートナー NGO、UNDP 事務所長、シニア・プログラムマネージャー、プロジェクト・マネージャー他と共にプロジェクト理事会のミーティングに参加。
- UNDP でのプロジェクト実施支援を念頭に置き、日本大使館の経済協力担当書記官との連携を密に図り、草の根無償資金協力、人間の安全保障基金、補正予算等、日本政府の ODA 案件に対する実現可能性を追及。日・UNDP パートナリシップ基金に関しては、着任直後より大使館書記官等の関係者と議論を繰り返し、プロポーザルの前段階に当たるコンセプト・ノートの作成に従事。UNDP ニューヨーク本部パートナーシップ局・日本ユニットの基金担当者との連絡・調整を担い、コンセプト・ノート作成に際して該当プロジェクト分野・予算額・タイムフレーム・含まれるべきステークホルダー等の詳細情報を収集し、コンセプト・ノートに反映させるよう心がけ、上司が本部へ提出する際の補佐をした。

- 2013 年のプロジェクト活動報告として、UNDP 内外に向けたプロジェクトレポートのドラフト作成、本年用の新たなフォーマット・コンテンツの提案・作成に従事。
- キエフにて、記者会見（“E-governance: Practice of Introducing Local Initiatives”）についてのテレビ局での撮影、国際会議（“Reform of Administrative Services Provision in Context of European Standards”）の際に同行し、上司の登壇の際の事務的サポート、議事録作成、サマリーをまとめ報告書として提出。また、同時にプロジェクトの資料を多数持参し、展示会 の機会を捉えて参加者へのプロモーション活動に参加。
- プロジェクト実施の進捗状況を UNDP のウェブプラットフォームに継続的にアップロードした。明解な文章、フォーマット、工夫を凝らしたグラフィックデザイン、リンク情報の有益性等が高く評価された。



【キエフの独立広場，ユースデーに開催されたイベントにて（2013 年 6 月）】



【オデッサ，UNV 研修にて（2013 年 10 月）】
（左：プロジェクトの発表をする佐久間さん，右：UNV ウクライナのメンバーと共に）

4. 就職先での活動について教えてください。

現在は外務省欧州局中東欧課において中東欧諸国の外交・政治経済情勢に関する分野での業務に従事しています。

5. 就職先での感想は？一番印象に残っていることは？

こちらに配属になってからまだ日が浅いので、これから内容的・事務的なことに関して理解を

深めていかなければなりません。担当は主にモルドバ、民主主義と経済発展のための機構（GUAM）、黒海経済協力機構（BSEC）に関連する業務です。職場の感想としては、昨今のウクライナ情勢を受け、これに関連・付随する情報量が想像以上に多く、非常にダイナミックな印象を受けました。刻一刻と目まぐるしく変化するウクライナ情勢が、同国のみならず上記のような周辺諸国・国際情勢に複雑に影響を与えて行きます。国内外のメディアや大使館から送られてくるこれらの情報をいち早く整理・分析して、外務省として迅速かつ慎重に対応をしていくことの重要性を日々実感しています。

6. 今後のキャリア・プランを教えてください。

今後も平和構築（及び紛争予防）をメインとした分野でのキャリア構築を目指して行きたいと考えています。平和構築とは言ってもそのアプローチの仕方は様々ですが、民主的ガバナンス・貧困開発・危機予防と復興の分野に関心があると共に、国内外で経験を積んで来ているからです。

例えば、持続可能な開発・経済発展をもたらすためには、透明性とアカウンタビリティのある選挙・行政の実現と汚職の防止が欠かせないと考えます。そのためには、本当に必要な市民のニーズが効率よく反映される、市民参加型のガバナンスが不可欠ではないでしょうか。更に、経済が発展し市民社会が成熟していけば、人と人との信頼関係も醸造され、武力衝突の前にまずコミュニケーションを通して問題を解決するといったコミュニティの創造にもつながり、ひいてはその安定・維持を通して紛争予防・平和構築につながるものと考えます。

よって、中・長期的視野に立ち最も多くの人々に寄与するためには、ガバナンスの向上が最優先事項であるべきだと考えるようになりました。ウクライナでの職務を通して得られた最大の収穫は、E-ガバナンスの推進が、こうした社会の実現のために具体的なツールとしてグローバルレベルで大きなインパクトを与え得るとの予見を得たことです。加えて E-ガバナンスは、武器・麻薬の違法取引（汚職と結び付くケースが多い）や人身売買に対する抑止力としても機能する可能性を秘めており、自然災害に対する緊急・復興支援活動においては、その効率性を向上させ平和的に活動を遂行する（物資や金銭を求めて略奪・暴動が発生することがある）上で重要な役割を果たし得るとの示唆を得ました。

大学院進学後は、MDGs、ポスト 2015 年開発アジェンダ、「UNDP 戦略計画」といったグローバル 이슈に関心を抱き続け UNDP や本事業での経験を積み、開発途上国支援分野でのキャリア構築を目指して来ました。UNV として積んだウクライナでの経験を更に発展させた形で、外務省の職員として現在の職務に貢献して行きたいと考えていると同時に、UNDP をはじめ国際機関でのポストを念頭に置きつつ、ライフワークとして平和構築や紛争予防分野での活動に取り組んで行ければよいと考えています。

7. 平和構築人材育成事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

本事業に何らかの形で関心を持たれた方は、事業説明会に足を運んで、直に主催者側や経験者

の話聞いてみると良いと思います。そうすることで、よりご自身の中で平和構築に関する具体的なイメージが湧くと思いますし、質問をすることができます。その機会自体がネットワーク構築になるかもしれません。事実、私は合計で3回若しくは4回出席したことを覚えています。本コースのプログラムが始まる前に、海外の大学院(持続可能な開発及び平和構築関連分野)にも合格通知をいただいております、どちらに進むべきか悩んだことがありました。その際に決定的となった助言をしていただいたのは、事業説明会でお会いした経験者の方でした。

また、平和構築や開発の分野でのキャリアの始め方は、人それぞれだということをよく耳にします。私の場合は、その典型だと思います(医療・診療放射線技師[その間に海外で活動するNGOに関心を持つ]⇒アジア7カ国を訪問・滞在(ダッカのグラミン銀行訪問、コルコタの死を待つ人の家でボランティア活動に従事等)⇒外資系[在職中に半年間休職し、アフリカ・中東を陸路で縦断]⇒大学院[UNDP シエラレオネでインターン・イタリア交換留学・貧困開発NGOに従事]⇒平和構築人材育成事業本コース・UNV ウクライナ⇒外務省)。学部生の時期から開発途上国に対する開発分野に関心を抱いた人よりは、遠回りをしたように映るかもしれません。しかし自身が振り返ってみると、これらの要素の内の一つでも欠けていれば今には至らなかったのではないかと感じています。

多くの方々とそれほど大差はないかもしれませんが、私が心がけていたことは、① できるだけアンテナを張って情報収集し(メーリングリストやSNSを含む)、② 勉強会やセミナー、グローバルフェスタ等に参加して、③ ネットワークの構築に役立てるよう努め、④ 今がチャンス(かもしれない)と感じた時には、できるだけすぐに行動してみたということだったのかと思います。

私自身、まだまだこの分野でのキャリア構築の道半ばですが、少しでも読まれている方の参考になれば幸いです。